



貞享式海印録

數字送字
食衣彩色
器文火
種々付方
諸要格注

六

5
4676
6





5
4676
6

貞享式海印録六

曲齋述

享和十六年
尾野貴
贈

凡取字も送字も耳周の髪をまうて文字の上より読む
一々可解云ハ一盛ニ山一ツのめき法流の抽子の耳にまうぬ二句
曰下ノ許すハ一
▲かくい(そ)も支考設も月洲成多しえより取字ハ字蓋も少く
美も抄すれハ坊字ハ取字も字蓋も少く
の更制ハ

子ハセツの陸のんさく
菲ハ今ハ隣ハことつて
女房の砂て一ツのむ
山橋の門ハ柱も十分の杖
お花をかこく黄ニ包満ハ
此案ハ男ハ一袴巾子
吸ハ松もさきこて袖ハ
注ハ二懐てそれハ入
換たてハ換のたうとよ人
幻ハ二一字ハ跡ハ板
人の情ハ二足ハ打寄
ひすもく活ハ二足ハ打寄
漫余の筆もあし付ハ十
ほけハ手てハ牽門をやく
滝きけハ二ツハツムツセリ
一ハふ欠てあう碑と云

カイ印 六

… 刀、扇、紙、茶、花、鳥、虫、魚、木、石、草、土、水、火、風、雲、霧、雨、雪、霜、露、日、月、星、辰、天、地、人、物、事、物、時、空、色、香、味、触、思、情、性、命、生、死、苦、樂、愛、憎、善、惡、美、丑、真、偽、善、惡、美、丑、真、偽、善、惡、美、丑、真、偽

… 刀、扇、紙、茶、花、鳥、虫、魚、木、石、草、土、水、火、風、雲、霧、雨、雪、霜、露、日、月、星、辰、天、地、人、物、事、物、時、空、色、香、味、触、思、情、性、命、生、死、苦、樂、愛、憎、善、惡、美、丑、真、偽、善、惡、美、丑、真、偽、善、惡、美、丑、真、偽

孫五

ま秋

ヤハ

程

山

浪

炭

ク

アカ

サル

フ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

ワヤ

あとりりも... 丹... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...
 丹... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...
 丹... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...

丹ハ美カニ風

多るふき判... 丹ハ美カニ風... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...

源川より大垣へ文通

高池武人の... 源川より大垣へ文通... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...

本因様

二月上弦... 本因様... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...

文返出

忌憚相元... 文返出... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...

本因

二月下弦... 本因... 池... 山... 浪... 炭... ク... アカ... サル... フ...

出候ありと云ふは分てあし

吉公は出る子に親の氣もあらず

の廿五ある子に親も十八九にて淋涙のまゝも才をいそげしや
り二三里を歩いて七日市橋の町に公あつた人の顔は天宮
の伊達よりたゞすの市の候はひんきと親をせむまよと
天よ

吉公はやる子に親の氣もあらず

やる子に親も十二三にてあつたに二十里もいそげしや
公も親のあつた愛あつたに二十里の長飯をいそげして母に云々のあつ
たに候なり

用長を所考ておくまのり下

旅麻はさむき老僧の味

かく付て後にて所考合られ候ては事をもといふまじらば白
の人々に進ぶべしとて

風長を振ておくまのり下

長兄をすまはれ候しつ

あつた所考てはこころも旅もある人にて用ふふきえ後の振て
ハの振つて今考まはまりしに若人たるを親のめくこと
しく矢張りある中若切ふあつた社あきひ必となりくは
兄しくするに及び候しつと考あつては候まはつたつ
して友とちのいひまごかまゆきとて二の白のさういひ
り七也

おさくら目下二捕も兄也

笠をふらたはこ吸ひあ

かくいふ時の留安を久あり考るあつたの宗明も
▲この和者の親里の候ては八捕山の所候も入候ては白の注し
「お赤」候も注し

お赤の馳まはれ候しつ

かくいふ時の留安を久あり考るあつたの宗明も
▲この和者の親里の候ては八捕山の所候も入候ては白の注し
「お赤」候も注し

お白親おの作の香くハセア鶴の流し記す

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

お白の馳まはれ候しつ

風ひききり山々の
何のうらふふ、人の衣うりて
きぬくや余々をそくちてやうよ
風引玉ふききり
さし留すまのゆほもすりきぬ
若い、さん、ちや、
あ、風ろよ、二人、
く、さらまると、
去、去、殿、い、い、
二人、あ、風、
清、り、
二、
時、
元、
酒、

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

元正
酒香
日秋
日秋
元正
酒香

白よりの人を... 記情もあらず... 人情より... 時ハその... 若かくても... 情後といふ... 才華白

細工くふ... 異加口...

コハ島を... 記情の... 白よりて... つかい... 次ハ...

勝ら猫のくせ...

それハ... 白よりて... つかい... 次ハ... 勝ら猫のくせ...

山川...

山川... 鹿を... 擗拍を...

まは... 了の用... 是つふ... 出るも...

夕日の橋と...

あを... 夕日... 七ア...

七ア者

七ア者... 七ア者... 七ア者... 七ア者...

れむあひまかくふと云詞のそふきあは後句の四の會お
とふりてりしれかかくのことく會て作りか案情を深むふ
たふありまの湖を天の川の海へておりの僕の仰れし情
を挿寫したる

三四 我一人忘きてあれハ皆そはる 杜若
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

三五 天窓よ付いてらる 分 井 飲
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

三六 山も笠着て 春日 晴の秋 巴分
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

三七 草花は 草花は 草花は 草花は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

三八 一は 二は 三は 四は 五は 六は 七は 八は 九は 十は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

かる用ふれいあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

三九 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四十 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四一 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四二 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四三 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四四 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四五 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四六 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四七 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四八 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

四九 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

五〇 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

五一 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

五二 雛の日の夜は 雛の日の夜は 雛の日の夜は
あひまのあひまを忘るておきたら何せんと言約ししを記しおき
と連ともきよろくとしとある情と又立てかくけりしは忘相
あひまの中にあきあきすし守

旅の友らと後をふり返り川あり
河に注する水の委食い 一葉
芳の福たき他風よて鹿の傍と云つてその辺をさすは
あらず通らずざる旅の友を傍のまじりて可なりと云ふ
たは付けあり次はうらうらと人な旅を久しくすむ人の旅を
ゆ人は旅よて色ひゆるそ風と云たて旅食の人の風を
けりゆりふりのそ風は似ても主旅のうらうらと河注の
ハ送付之

皆をらくといひらく午 杉風
あの男やらと云を立空 酒也
河の用種四三三 頂く
今ひらくを人よ上と云て是ふさくと云け次はハあ
の男といふを元旅の旅人と云て童の用を田の者の
としたりあのたふさくと云河注の「うらるる
あふの風俗の委を—— 旅のうら」よし女遣のふさ
け「田種時ふはふら旅旅と、又情の用をつくら麻と
あむむ

演の小供のあふ日風又 曲
三三 習ハ 〇と仮のあふ元等訓て 座元
正二 漢の正供のあふ日風又 座元
赤い漢の正供のあふ日風又 座元
れより正供のあふ日風又 座元
をすあふてくはあふ日風又 座元
正の正供のあふ日風又 座元
るさふ之管を中よて左右よりすくすく又あふ日風又 座元
これさふ之管を中よて左右よりすくすく又あふ日風又 座元

正三 他注の正供のあふ日風又 座元
と付の正供の正供のあふ日風又 座元
まの正供の正供のあふ日風又 座元

正三 他注の正供のあふ日風又 座元
と付の正供の正供のあふ日風又 座元
まの正供の正供のあふ日風又 座元

正三 他注の正供のあふ日風又 座元
と付の正供の正供のあふ日風又 座元
まの正供の正供のあふ日風又 座元

正三 他注の正供のあふ日風又 座元
と付の正供の正供のあふ日風又 座元
まの正供の正供のあふ日風又 座元

正三 他注の正供のあふ日風又 座元
と付の正供の正供のあふ日風又 座元
まの正供の正供のあふ日風又 座元

此の息子の稱の名も知らず
元と和者ハ言ハせぬきあり
といふ息子と和尙と向合ふれど
もに他より人の河りて作りし
りて其跡を忘れず

東方禁酒の弁

お白を画。元々也。實相。賣相。賣。出。お。ト。元とつ
る。次してあり。ト。く。ハ。何。て。り。か。元。れ。ぬ。白。ハ。あ。き。有
あり。御。遊。ハ。一。字。一。点。と。な。り。て。還。却。ハ。余。白。と。い。ふ。も。む。か。ま。け
て。委。任。さ。す。る。も。の。あ。き。が。さ。る。あ。ら。め。あ。る。構。ハ。あ。ら。ん。ん。理。ふ。一
又。京。元。出。画。の。教。は。只。元。の。名。の。付。京。本。智。尊。と。人。は。お。こ。す。と。云
ふ。迷。へ。付。名。お。旅。人。と。思。ひ。て。ゆ。く。付。方。京。元。の。傳。の。傳。の。延
と。云。ふ。京。元。の。人。お。白。を。定。む。は。付。熊。鷹。人。情。は。只。元。の。傳。の。延
の。付。山。川。の。傳。ハ。智。尊。の。教。と。あ。り。て。金。秋。付。伝。ハ。只。元。の。傳。の。延
子。の。次。ハ。飲。食。智。尊。の。付。ハ。河。作。の。内。合。付。智。尊。の。付。ハ。只。元。の。傳。の。延
支。後。の。付。ハ。只。元。の。傳。の。延。の。付。ハ。只。元。の。傳。の。延。の。付。ハ。只。元。の。傳。の。延
て。中。物。多。く。自。由。に。書。き。お。白。を。定。む。は。付。熊。鷹。人。情。は。只。元。の。傳。の。延
あり。この。お。白。ハ。二。白。一。書。ハ。智。尊。の。教。と。あ。り。て。金。秋。付。伝。ハ。只。元。の。傳。の。延
連。ひ。お。白。の。名。は。後。白。の。ま。じ。ひ。ハ。智。尊。の。教。と。あ。り。て。金。秋。付。伝。ハ。只。元。の。傳。の。延
お。白。の。名。は。後。白。の。ま。じ。ひ。ハ。智。尊。の。教。と。あ。り。て。金。秋。付。伝。ハ。只。元。の。傳。の。延
を。あ。ら。ん。ん。理。ふ。一。又。京。元。出。画。の。教。は。只。元。の。名。の。付。京。本。智。尊。と。人。は。お。こ。す。と。云
備。后。に。寄。る。教。師。ハ。熊。鷹。の。名。を。お。白。と。い。ふ。は。只。元。の。傳。の。延。の。付。ハ。只。元。の。傳。の。延
の。付。け。あり。一。書。格。と。い。ふ。を。融。く。せ。ば。只。元。の。傳。の。延。の。付。ハ。只。元。の。傳。の。延
こ。び。き。り。す。可。し。

お白を画と元並て叶ふる例

深々の深々 不二の深々と元で床の深々と付けり
深々と深々 深々と深々 深々と深々 深々と深々
深々と深々 深々と深々 深々と深々 深々と深々

付いお白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例

お白を元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例

お白を元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例

お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例
お白と元並て叶ふる例

てまう様ハききわて

加山

△一巻一巻を二二用ひて夏候
層岩の画に似て萩の小岩垣
自 高し洗て清き萩の月

一巻

あつくや夏はあてあみ萩
あみ萩の月をうけておとて
あてあ井の清き月をうらむ

何山

あらの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

あま

あまの月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩
あみ萩の月をうけてあみ萩

二巻

史邦

支考

田紫

着

山

自

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

カク印六

三十

山カタ
日ヨ日並
石カ仙
数日並
そぬよい言い日産や
厄道ハ夫脊の麦飯喰習ひ
造ふる子のよこよ日のてら
うり今引すて夜の三日の月
をう互のありて仕合
和来云よとふ七日
何と思いの灯籠文引く
おのの拍子も如けて曇り
每ふふその一秋風
△松竹を
松竹の冥加を冥心色の市
磨をきよる曉の霜
高流て机の光の羨すき
秋言ふふりて人も羨すき
夕よふさう村にそれて暮の月
△伴相成
白鹿在る孤くをさすうて
白き籠より赤い籠の月とくと
曇る日ハ旭も天意の病るやう
言いゆを知らすつき種
されこそ西ハ法杖志の言
言のくもりとて死て又病
ありらむく日とて悲のよも
△非祇成
庭猫着榻し寝て仄るある
玉らぬ役者藝加あき
昔さる院下口おを借くれ
初禱の札のちちちちより
江戸迄の夜更八月十六日つ

松竹
高流
秋言
夕よ
△伴相成
白鹿
白き籠
曇る日
言いゆ
されそ
言のく
ありら
△非祇成
庭猫
玉らぬ
昔さる
初禱
江戸迄

不為翁子ト種若花キコ如る仙翁
舟田真尺安中望之秋竹少風
舟田真尺安中望之秋竹少風

夕コ
山カタ
一を付
踏
疏忘
言花
古松
山
天
次白
マクラ
子マキ

△秋散成
エきも兄をハ佛切とまき
るう切ハ月をくくりてとくと
佛の装束を盆の夕くとま
波り初ハの涙痕息災
池波秋澄余の世に極やう
地頭うらましの官情の札
△名お成
玉子泊也時と浪戸を折流し
泣き登らぬ大浪のあと
病氣枯葉は依の江の春を絶て
おの世の秋の心君撰に
箱の二巻夕日を月と改て
紅の飾や秋意き
衣穿は度會滾る家の風
名流啼くき帯籠をとる
さ月まつか春の葉のまわむ
△山。天哉
和よふあやや花をとるらむ
松竹は板荷に秋の月
雲はよの夜の哀の山
おとりの雲より月の為く
秋を度会の手のやまうせ
天一作回福をうあ
渡香羽の境の秋は天のうや
△月作巻成
赤士持灯を括して眠る
そくとすうたる女房の夢文て
血指の麻子尼衣や君の心む
幽霊ハ本履をばいて杖つて

カイ印六

後小
さ楮風
之屋
六之
白子
翁杉
翁杉
翁杉
文之
破下
破下
尺
尺
才丸
才丸
文志

山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去

山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去

山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去

カイ印六

右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去

山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去

山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去
 山カ
 右正松ニ去

先兄... 機のありかし
 平賣の酒... 衣袋...
 酒をたらし... 振替て...
 衣正格... 衣の裏側...

海印録六終
 灰屋輔二
 太田屋六藏
 笹屋喜兵衛
 尼崎屋喜三右衛門
 油屋仲藏
 世並屋伊兵衛
 山城屋彦八
 野上屋権左衛門
 中津屋卯助
 小嶋屋義八郎
 紙屋惣右衛門
 秋田屋太右衛門
 河内屋茂兵衛
 伊丹屋善兵衛
 松村九兵衛
 森本專助
 鹽屋弥七

播州 姫路	灰屋輔二
備中 倉敷	太田屋六藏
備後 福山	笹屋喜兵衛
雲州 松江	尼崎屋喜三右衛門
因州 鳥取	油屋仲藏
藝州 廣嶋	世並屋伊兵衛
長門 萩	山城屋彦八
長門 下関	野上屋権左衛門
豊前 小倉	中津屋卯助
肥後 熊本	小嶋屋義八郎
肥前 佐嘉	紙屋惣右衛門
浪	秋田屋太右衛門
華	河内屋茂兵衛
	伊丹屋善兵衛
	松村九兵衛
	森本專助
	鹽屋弥七

